
おばさんになるまで...

天龍光照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おばさんになるまで…

【Nコード】

N5174BA

【作者名】

天龍光照

【あらすじ】

入社して1年。彼氏も作らず、同期の友人と毎週金曜日の女子会。今日もいつものように飲みに来て、いつものようにふざけあい楽しんだ。恋なんて、縁遠いと思っていたのに…

恋って『する』ものですか？
それとも…『落ちる』もの？

〈登場人物〉

〈登場人物〉

市橋 彩・・・23歳。会社員。くるりとした癖っ毛で、長い髪をしている。性格は、「サバサバしたお姉さん」と言ったところ。酒に弱い。彼氏募集中。

二宮 絵里・・・23歳。彩の同期の友人。ショートカットで、痩せた体系に似合わず、大食家で、酒に強い。性格は、「ボーイッシュ」の一言。彼氏募集中。

三輪 恵子・・・23歳。彩の同期の友人。肩までのセミロングの髪は、ストレートで綺麗だ。何とも頼り無げで、凹みやすい性格だが、芯がしっかりしている。彩と絵里の良き理解者。

清水 大輔・・・35歳。若くして亡き父から引き継いだ会社の社長となった。大人びているが、老けすぎず、背は高いし、顔も悪くない。

後藤 健一・・・25歳。居酒屋店員。背は清水程ではないが高い方。美男ではないが、笑顔が素敵で明るい元気のいい男性。

後藤 健次郎・・・10歳。健一の腹違いの弟。子供の特権をフルに扱うマセた子供。兄に似て、笑顔は可愛い。

村橋・・・恵子のフロアのお局。女を捨てた男のような嫌な女。

夏木・・・通称：ナツナツ。営業部部长。彩の上司。丸々とした

第1話 居酒屋

ある夏の夜。8時で暗くなつたばかりの夜道には、まだ会社帰りの者で溢れている。そんな街の一つの居酒屋に、いつものように女^{さかな}人が会社の愚痴を肴に飲んでいた。

「ああ！もっつ！」

ドンツと勢い良く、空になつたジョッキをテーブルに戻す音が鳴る。どうも今夜、荒れているのは三輪恵子のようだ。肩まで伸びた綺麗な髪がサラサラと彼女の動きに合わせて、揺れている。

「ちよつと、開始早々、ピッチ早くない？」

隣の友人が泥酔しないか心配しているのは、オレンジジュースを片手にした市橋彩だ。

「まあまあ、話を聞こう。何が有つたの？」

二宮絵里は、ロックの日本酒をテーブルに乗せると、目の前に座っている友人のジョッキにビールを注いでやった。

「私のフロアに居るお局。知ってる？」

恵子は、ビールを一口飲むと2人に聞いた。

「恵子のフロアのお局って…」

「ああ…村橋さんか」

彩も絵里も顔を歪めた。話題の村橋という女は、年は50ぐらいで女を捨てたような風貌ふうぼうをしている。常にすっぴんで眉の形すら整えていない。髪も男のように短髪で背も低く、ベストとスカートの女子社員の制服を着ず、いつも男物のグレーのスーツを着ているのだ。しかも大股で歩く。いつもピリピリしていて、詰まらない事で若い社員を説教するので有名だった。どうも、その説教を今日は恵子が受けたようだ。

「単なる八つ当たりも良い所だわ！」

恵子は、グビグビツとジョッキを飲み干した。

「私とお局がダブルチエックした書類に間違いが有ったのよ。それを、私だけが悪いみたいにネチネチネチネチネチと…ずっと皆の前でお説教よ。嫌んなるわ…」

恵子は、ジョッキにビールを注いだが、ビール瓶の中からは少しだけ注がれ空になった。

「すみませええん。梅酒一つ」

「今伺いますのでお待ちください」

店内はそれなりに込んでいる。金曜の夜だから、当然なのだろう。

「お待たせしました。『刺身の盛り合わせ』と『たこわさ』です」

すらすらとした男性店員が皿をテーブルの真ん中に置き、ビール瓶を取った。

「ええと、梅酒でしたね。他には？」

「あ、じゃ私も梅酒」

絵里が、空になったグラスを店員に渡す。

「彩さんは？」

「へっ？」

通路側に座っていた彩は驚いて店員を見上げた。店員は、白い歯を見せてニカッと笑顔を見せた。

「へえ、名前覚えてたんですか？」

絵里が、にまにましながら店員に尋ねた。

「ええ、毎週金曜にいらつしやる美女トリオ。僕、毎週必ずお客様テーブルを担当しているんですよ。気付きませんでしたか？」

「ええ、そうなの？」

この居酒屋は1か月前に出来たばかり。メニューの多さと美味しさ
と安価で、開店してから、3人のお気に入りとなっていた。思い出
してみれば、確かにこの店員の顔以外に、他の店員の顔はあまり覚
えていない。

「で、どうします？ジュース残り少ないですよ？」

驚きすぎてジッと店員の顔を見ていた彩は慌ててしまった。

「あ、ええっと…」

「梅酒を全部で3つにして」

「かしこまりました」

決めかねていると、絵里が注文を済ませてしまった。

「ちよつと、勝手に決めないでよ…」

「良いじゃない。少しは飲みなさいよ」

絵里は、たばこに火を点けた。

「恵子も、今日は飲んで。全部忘れる！」

「うん」

恵子は少し残っていたビールを飲み干した。

「まあ、文句言ったって、あの人が仕事出来るのは事実だからね。他の社員が全員、私の敵ってわけじゃないし…」

恵子は、空になったジョッキを眺めながら少し嬉しそうな顔を見せた。それを彩も絵里も見逃さなかった。

「ははあ〜ん」

「男か…」

恵子が、パツと顔を上げると2人ともにやにやしている。

「えっ、ち、違つよ！」

「慌てちゃって〜」

「増々怪しいですな…」

恵子の顔が見る見る赤くなっていく。

「言いなさい！誰！？」

隣に座っていた彩は、恵子に抱きついて意中の男性の名前を聞き出そうとする。そこへ、先ほどの店員が梅酒を3つお盆に乗せて現れた。

「クスクス…本当に仲が良いですね」

その笑顔を見ると、彩は、なんだかこそぐつたいような感覚を覚えた。

「ね…彩さ」

「ん？」

店員が戻っていくのを確認すると、今度は絵里が彩に詰め寄った。

「あんだ、恋に落ちた？」

「はあ？」

思わず梅酒を吹き出しそうになりながら、彩は驚きの声を出した。

「まあ、あの店員は彩狙いだね」

「あ、恵子もそう思った？」

「思った、思った」

どうも、ターゲット変更のようだ。今度は、絵里と恵子がにやにやしなから彩の顔を覗き込んだ。

「な、何言ってるのよ」

思わず顔が赤くなってしまう。

「彼氏にしちやいなよ」

「だからあ…違ってるば！」

彩は、もう黙って梅酒を飲むしかない。

「ああ、恵子にも春。彩にも春かあ…良いなあ。私にも、春よ来い
「！」

「ぶっ、何それ」

3人は笑い出した。

「でもさ、冗談無しで、彼氏欲しいとか思わないの？」

恵子が彩に尋ねた。絵里も恵子も入社した頃には彼氏が居たが、1年と持たなかった。彩は、ずっといない。

「ん〜…部長にも言われたんだよね…」

「ナツナツ？」

ナツナツこと夏木部長は、営業部の部長で、背が高くぶっくりとした体形が特徴のにこにこ笑顔の上司だ。彩は、上司に恵まれたようでいつも可愛がられていた。

「ナツナツがね、お見合いしなかった…」

「お見合い〜？」

絵里も恵子も驚いてしまう。

「お見合いって言っても、仕事だと思って一回会ってくれば良いからって」

「って事は、ナツナツめ。お客さんに頼まれたのを断れなかったんだね」

「断れなさそうだもんね…あの笑顔の仏のような人には」

3人とも、ふっくらした顔のおじさんの憎めない優しい顔を思い出していた。

「どうすんの？」

「まあ、仕事と思って良い。って言われたし……」

了解したんだな。と絵里も恵子も分かり、それ以降はメイクやフアツションの話で盛り上がった。

「お待たせしました」

入店してから、2時間半。あつと言つ間に時間は過ぎ、最後に頼んだアイスが出てきた。

「抹茶アイスは？」

笑顔の店員が尋ねるので、彩は、目の前の絵里を左の手の平を見せるように「こちら」と答えた。

「……」

「……」

「……」

一瞬3人は固まった。何を考えたのか笑顔の店員は、その彩の手の平に抹茶アイスの皿を乗せたのだ。変わらず笑顔である。

「……すみません。つまらない事しました。」

「ぶっ」

苦笑しながら抹茶アイスを絵里の前に置いた店員を見て、絵里が噴ふ出した。きた

「ふふふふっ」

つられて恵子も笑い出した。

「…ごめん。突っ込みそびれた」

左手そのままに彩も笑い、店員に詫びた。店員は、尚も笑顔でチョコアイスを恵子に、バニラアイスを彩の前に置いた。絵里は、ジッと店員の顔を見ている。

「？」

「分かってて聞きましたね」

「さあ、何の事でしょう？」

店員は、絵里にとぼけて答え、厨房に戻ろうとした。

「あ」

店員が、何か思い出して足を戻した。

「この前、ポイントカードって作りました？」

「ポイントカード？」

3人は首を傾げた。

「そんなの有ったっけ？」

「最近出来たんです。先週、ドタバタしちゃってお渡ししたかどうか」

先週の金曜日、確かにこの店はすごい人で溢れていた。どこかの送別会なのか、激しくドンチャン騒ぎをしているサラリーマンが居た事を思い出す。彩達は、カウンターに席を詰め、狭い空間での飲み会となったのだ。

「良いよ。ポイントカードって無くしちゃうし」

いつも会計をしている彩は、手を振って断った。

「ええ、無くさないで下さい。20ポイント貯まると、千円分の金券として使えるんですよ？」

「んん、インパクト有れば無くさないかもね」

店員の押しに、彩はそんな事を言ってみる。

「インパクト…わかりました！」

店員はそう言うと厨房に戻っていった。

「インパクトって…ラインストーンとかでデコっちゃったとか？」

「A4サイズのカードとか？」

「それ、どっちも財布に入らないじゃん」

3人は、アイスを食べ終わると会計へと席を立った。店の入り口には、まだ待ちの人が多く立っていて混雑した。

「先に外出てて」

彩がそう言うと、絵里も恵子も人の間を縫って店の外へと出ていった。

「うちそうさま」

「ありがとうございます。はい。おつりとポイントカード」

おつりを受け取るうとした手には、普通サイズのカードとおつりが乗せられた。

「ありがとうございます。じゃ」

「待ってますから!」

外で待つ2人の所へ行こうとしたら、店員に後ろからそう言われた。

「?」

彩が振り向くと、店員は真面目な顔をしてこちらを見ている。が、その顔はすぐにいつもの笑顔へと変わり深々とお辞儀をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5174ba/>

おばさんになるまで...

2012年1月14日11時58分発行